

資料室だより 98

Correa de Arauxo 1584-1654 について (1)

通称アラウホと呼ばれているスペインのオルガン音楽の大家についてご紹介します。教会音楽科の方々は、あまり弾く機会がないかもしれませんが資料室には長い時間をかけてアラウホの楽譜が収集され、気がついてみるとかなり所蔵しています。楽譜はこの家にかかわる方々のニーズに応じて収集していく部分もありますが、資料室としての質の高さを維持するためにも、よいエディションが出れば購入を検討します。

昨年、アラウホの「オルガン技法」(序文と解説)という解説部分の日本語を購入したので、今年度はその本体 *Facultad Organica(Alcala 1626)*を購入しました。

アラウホは作曲家、オルガニスト、理論家と定義されていますが、正式に理論的な訓練は受けた記録はありません。セビリア大聖堂の少年聖歌隊員であった可能性がありますので、セビリア大聖堂のマエストロであったグレーロの薫陶を受けたことも考えられます。1599年にセビリアのサルバドール教会のオルガニストに任命され、また司祭に叙階されてマドリッドの王立エンカルナシオン修道院のチャプレンを勤めていた時期もあります。しかし、訴訟を起されて何度か投獄されていたこともあり、穏やかならぬ人生を送ったようです。故郷のセビリア大聖堂のポストを望み何度も挑戦しますが、叶わず、セゴビアに就職します。晩年になってセビリア大聖堂は彼が長年希望していた地位を与えようと故郷のセビリアに招聘しますがアラウホはそれを拒み、最後は貧困のうちにセゴビアで没したと記録されています。

作曲家としての彼はオルガン曲にしか興味を示していません。司祭であり大聖堂で働いていたにもかかわらず宗教作品には興味を示さず、オルガン曲のなかでも典礼的タイトルが付されているのはわずかに短い3曲だけです。しかも彼の本領は発揮されておらず、つまり対位法の技法はなくすべてホモフォニック、そしてそのうちの1曲は *Lauda Sion* ですが、グレゴリオ聖歌の定旋律すらなく、あとの2曲はスペイン語のビリャンシーコの形式で書かれています。彼の本領はティエントといわれる純粋器楽曲でした。

オルガンに関しては生来の優れた能力、並外れたヴィルトゥオーゾであったということと激しい気性の持ち主であったことが連動しているように私には思えます。スペイン・オルガン音楽史上ではアントニオ・デ・カベソン、トマス・デ・サンタ・マリアとパブロ・ブルーナ、カバニリエスらの中間に位置します。

では、次回に彼の出版楽譜やエディション、作品そのものについて触れたいと思います。